令和３年度
第３回神戸市総合教育会議

と　き　　令和４年３月１５日(火)

１０：００～１１：３０

ところ　　三宮研修センター８階　８０５号室

神戸市企画調整局教育連携課

１．開　　会

○企画調整局教育連携課長

定刻になりましたので、令和３年度第３回の神戸市総合教育会議を開会させていただきます。

進行は市長、よろしくお願いいたします。

○久元市長

総合教育会議は去年の１０月以来ですけれども、お忙しい中、長田教育長、また教育委員の先生方には御出席いただきまして、ありがとうございます。

コロナの関係は第６波の最中にありまして、新規感染は少しずつ減っていますけれど、減り方が鈍いことと、かなり高止まりをしていることから、今後、予断を許さないわけです。その意味で、学校現場では先生方の御苦労が大変多いと思いますけれども、緊張感を持つと同時に、普通の学校生活とどう両立させるのか、引き続き、教育委員会の皆様方の御尽力をよろしくお願い申し上げたいと思います。

今日は、教育大綱の学力の向上、併せて体力の向上、非常に大事なテーマですけど、これまでなかなか十分な議論ができていなかったので、今日はしっかり議論をしたいと思います。

簡単に資料の説明をよろしくお願いします。

２．議　　題

（１）学力向上に向けた取組

○教育委員会事務局教科指導担当部長

資料の説明をさせていただきます。

まず、学力の向上について説明をさせていただきます。２ページ目に、全国学力状況調査、小学校６年生の近年の状況を説明している資料がございます。平成２８年度から、令和３年度の経年変化でございます。

横軸の０は全国平均を示しておりまして、平成３０年度を例に取りますと、算数は

全国平均を０．５％上回り、国語については１．５％下回っていることを示しております。

令和３年度においては課題であった国語ですが、改善傾向が見られる状況にございます。

次の資料を御覧ください。これは中学校の状況でございます。

中学校におきましては数学、国語ともに全国平均を上回っている状況でございます。ただ、国語につきましては、より力をつけるためには、一定の条件に沿って書くという観点において改善が必要であると分析しております。

続いて４ページ目になりますが、この結果を踏まえまして、児童生徒に多面的な学力をつけるためには、やはり授業の改善が必要と考えております。また、そのための教員の資質向上を図ることが重要と考え、取組を進めているところでございます。

１点目は、基礎学力の定着ということで、有識者の専門的な意見をいただきながら、この結果をしっかりと教育委員会で分析して、各学校に対して改善の方向性を示しております。

各学校においても、結果を検証して改善計画を立てて、市が独自に開発いたしました教材等を活用するなど、授業改善に取り組んでおります。

２つ目は、今年度より１人１台の端末等のＩＣＴを活用し、授業の質の向上に努めております。授業を行う教員に向けて、授業モデルを示す、学習資料を提供するなど、支援に努めている状況でございます。また、教員の資質向上に向けては、教員育成指標を踏まえた、計画的な研修を実施しております。

各学校におきましても、校内研修や授業研究を行って、自己研鑽に努めている状況でございます。特に初任者に対しましては１年目に法定研修を、２年目、３年目は独自の研修を加え、育成３年プランに沿ってミドルリーダーや指導主事等が支援者となり、若手育成にも努めているところでございます。

４つ目は、総合的な学習の時間におきまして、子供たちにとって身近な自然や地域

の取組、それらに携わる人との出会いを通して、環境や福祉問題等を自分事として捉え、主体的な学びを通して、創造力やコミュニケーション力の育成を図っているところでございます。

もう少し具体的なところを説明させていただきます。次のページですけれども、基礎学力の定着というところで、小学校の国語を例に挙げて説明させていただきます。

そこに示しているように、小学校におきましては複数の資料を関連づける、また、目的に沿って自分の考えをまとめる力や、根拠を明確にして一定の条件に沿って文章を書くところに課題があると分析しておりました。

このような課題を学校と共有して授業改善に取り組んでおりまして、その具体的な対応が下に書いておりますように、まず各学校におきまして、国語はもちろんですが、全ての教科において、対話または自分で考えて書く場面を意図的に設定するなど、言語活動の充実をさせているところでございます。また、自分で考えまとめる力の育成を目指して開発しました、神戸市独自の教材も積極的に活用しているということもございます。

他の教科におきましても同様に、分析結果と改善ポイントを示した資料を全職員に配布し、授業改善に取り組んでいるということを続けております。

続いて、ＩＣＴの活用の授業の様子を説明させていただきたいと思います。

これは４年生の算数の面積を求める授業です。まずは教員がシステムを使いまして、子どもたちの端末に当日の授業の問題である複雑な形をした図形を送ります。子供たちは端末上で分けたり、切って場所を変えたりなど試行錯誤しながら面積を求めています。

その後、端末に自分の考えをまとめまして、友達と意見を交わすことで多様な考えに触れ、学びが広がったり深まったりしているところでございます。また、子供たちの考えは教員の端末で集約されておりまして、全体で共有もできます。深めたい内容があれば、写真の４枚目にありますように友達に説明する場面も設定しております。

このようにＩＣＴの活用により、児童生徒が自分の考えを基に試行錯誤できることで、当然学習意欲が高まり、自発的な学びにつながっています。また、教員にとりましては、自分の端末で子供たちの学習状況を全て把握することができますので、個別の支援や指導に役立てることもできます。

次の資料です。この写真は小学校５年生理科の授業です。雲の動きにはきまりがあるのかという課題の授業でした。

１枚目の写真は教員端末から子供たちの端末に気象庁のデータを送信しております。子供たちはその送られた日と同日に端末を持ち、運動場に出て、そのときの雲の動きを撮影しております。

子供たちが撮ってきた写真と気象庁のデータを比べることによって、雲の動きの決まりは西から東に動くということを実感しているような授業でございます。

最後の写真は、気づいたことを子供たちが話し合っている場面ですけれども、右側の子どもはデータには雲がないけれども、自分が撮った写真には雲が写っていると、どこから来たのかと友達と相談していました。その後、彼は自分でそれを調べるということが始まりました。

児童にとっては、興味を持って自ら学ぼうとすることが、とても重要と考えております。これからもこのＩＣＴを効果的に活用いたしまして、児童生徒の主体性を引き出し、友達との協働的な活動を通して深い学びにつなげながら、学力向上に取り組んでいきたいと思っております。

説明は以上でございます。

○久元市長

ありがとうございました。

前座みたいな形でお話させていただきますと、１年ぐらい前かもう少し前かもしれませんが、小学校、中学校の校長先生方とお話をして、その後自由に質問をしていただく機会がありました。非常に有益だったのですが、ある校長先生から、市長は全国

の学力テストのことばっかり言っているということをおっしゃったので、そのときに私から教育大綱のことを申し上げました。教育大綱については、非常に注意深く書いているつもりですと。「学力とは、いわゆるテストの結果のみを意味するのではなく、社会において自立的に生きるための知識、教養、感性といった人間力の基礎、基本を反映するものと考えられる。このような多面的な学力を伸ばすには、様々な施策が必要で、それらの成果の一つとして、全国学力・学習状況調査の結果などが、全国トップクラスとなるよう、すべての子どもたちに基礎的な学力が定着するような教育を進める。」ということで、決して、学力テストの成績を上げるために、あらゆることをやろうということを、教育委員会にお願いしているのではありませんということを申し上げて、有益な意見交換をさせていただいた。

そういうことを前提にしてこの学力テストの一端を説明していただいたわけです。これ以外にも教育委員会事務局は、いろんなデータも持っていると思いますが、今日は説明をできるだけ簡略にしていただくということをお願いしましたので、そういうデータを提示していただきました。

今日は前半が学力、後半は体力。この学力の現状を先生方が教育委員会として、今の神戸市の子どもたちの学力をデータも含めてどういうふうに認識されているのか、というあたりから前半は議論していただいて、それを前提としてこれから子供たちの学力を向上させるためには、今いろんなことが行われているわけですが、さらにこんなことをやはりしたほうがいいという形で議論を進めて行ければと思います。

まず現状認識ですよね。どなたからでも結構です。

○山下委員

教育委員の山下です。

現状については、私個人としては、とりわけ、この間少しずつ上向きになるような傾向もあって、その辺りでは学校の先生方、現場の先生方の頑張りが非常に感じられるところと思っています。

その一方で、学力ということを論じるときには、高い低いの水準の問題と、中身の質の問題、そしてそれぞれ個人間、あるいは学校間、地域間の格差の問題。おおよそ、３つぐらいの視点があると思いますけれども、そのうちの格差の問題についてはこれからもう少し重点的に取り組んでいく必要があると思っています。

具体的には、学力の問題を論じるときに、例えば先ほどの、まず一つに興味ということがありましたけれども、それを大事にしながらも、興味は自然に生まれるものではないので、その辺りで先生方のお力添えを多分にいただきたいところと思っています。

○本田委員

教育委員の本田です。

今、山下委員からもありましたように、この全国学力調査の状況を見ていても、改善が見られていたりとか、あと分析に基づいて独自の教材を使ってという効果は一定見えていると思います。

やはり市長が言われているように、テストだけではなくその知識だったり教養だったり感性というところにおいては、本当に国語、算数というものだけではなくて、音楽だったりとか、アートの部分というところも少し大事になってくると思っております。

今ＩＣＴが入ってきて、試行錯誤したりディスカッションをしたり、対話形式の教育が大分充実してきているのではないかと思っていて、そこは子供たちの感性だったり興味を引くというところにはすごく重要だと思う一方で、授業を一方的にというわけではないですけれど、享受する形よりはやはり時間もとてもかかると思うので、その辺り授業時間の中で、どれだけ工夫して、対話というところが、このＩＣＴを使うだけでも、子供が慣れるにもというところもありますし、この時間をどううまく使って、ここを充実させていくかというのは課題と考えております。

○今井委員

長引くコロナと、それと並行するようにＩＣＴを前倒しでいろいろ整備していただいて学校教育現場が激変していると思います。

今なんとか、学力調査の結果は上向きではありますけれど、他方、定着度調査で理科がかなり問題・課題があるということが発見されたり、今のこのテストの一部分を切り取るというよりは、本当に子供も注意深く見守って、注視していかなければいけない、この数年の影響がどう出てくるのかというのを注視しなければいけないと感じています。

先ほども、子供のやる気を育てるというのが本当に大事で、私でも自分の子どもや周りの子供を見ていますと、小さい子供は本当にやりたいし、できるようになりたいという、とても自然な素直な気持ちを持っていて、それを基にいかに低学年のうちからそこを大事に伸ばしていくかというところが、すごく求められるところです。本当に現場の学校の先生たちが頑張っていただいているところで、先生たちを支えるために、多忙化の問題にもつながりますけれど、先生たちの環境を整えて、子供たちそして授業に本当に注力できる環境を整えるということが、すごく大事だと思っているのと、家庭との連携、家庭教育です。先だって、家庭教育の手引きというものを教育委員会から学校現場に提示していただいていて、その中でも、家庭でどう取り組んだらいいかということと、それをどうやって学校と連携していくか、宿題の一つ、出し方一つとっても、うちの娘を見ていても、音読毎日とか、漢字とかではなくて、もう少しいろいろ伸び伸びした違うやり方や本人のやる気を引き出すやり方があるのではないかとか、そういう家庭学習との連携、両立というのもすごく大事と見ています。

○正司委員

教育委員で、議論をこれまでしてきているので、重なるところ、考えがあるかと思いますけれど。まず神戸市の教育大綱の１番目のところに、学力について書いている提言、非常にいいといつも思っています。

そうは言っても、全国の学力調査があるもので、この結果がやはり気になるところ

です。今般、国語が上がってきたというのは、これまで教育委員会として、いろいろ取り組んできた努力が出ていると思いたいところですが、逆に言うと、こんな急に上がって大丈夫かというのが少し気になるところです。一方で、これはあくまで平均値の話なので、山下委員もおっしゃいましたけれども、個々の人がどういう状況なのかはちゃんと把握しないといけないし、絶対水準として小学生として到達してほしい水準にどの分野は欠けているのかという分析を、さらに進めないといけないと思っているところです。

そんなところで、教員の方々が気にされて努力した結果上がるということは、先生方の力が非常に大きいということも示しています。昨今よくいわれる知識を教え込むというよりも、学びを促進するという役割が先生方に、以前よりさらに強調されるようになったという点。我々としてもそれを現場とともに考えて、どういうふうに実現できるのかということをさらに詰めていかないといけないと思っています。

国語について自分の考えで書くことに注力しているという話がありましたけど、確か４月この場で、竹内准教授を招いてスマホについて議論したときに、神戸の子供たちの議論、しっかりできているのは素晴らしいとお褒めいただいたように、成果は出てきていると思っています。ただここで油断するとまた落ちるので、さらにこの方向性をしっかりと強める必要があると感じています。

最後に、市長もおっしゃいましたけれど、学校だけで学力はつくものではないということを理解し、市民の方々というか、御家庭の方さらにはコミュニティの方々全体で支援、子供たちを見守るような体制を、我々としてもつくっていくことが重要になると感じているところです。

○梶木委員

教育委員の梶木です。よろしくお願いします。

国語の成績が伸びてきた、上がってきたというのは非常に喜ばしいことだと思います。先生方の努力は非常にあったのだろうということと、学校現場を見にいっていま

すと、図書館がとても変わった。これはとても大きいことだと思います。本があって図書館がありますけど、その配架の仕方だったりとか紹介の仕方だったりとか、図書館司書を置いていただいたことによって、学校の図書室、図書館が変わったことが子供の興味を引き出すきっかけになったと思いますので、そこはすごく、私は各学校で大きかったし、それを活用する教育ができているというのも大きいと思っています。

そういう意味では非常に環境は大事であり、学習環境といいますか、子供たちが学びたい、興味を抱いていくという環境が大事な中、コロナになっていろんな経験を体験する機会が奪われてしまったということで、密になってはいけないというので、いろんな授業も体験の授業というのは仕方なく減らされてしまいました。そういうことで、例えば理科の実験も少なくなっていたり、家庭科でも調理実習ができなくなっていたり、いろんな子供の時代にしなければならないことをしないで大きくなっていることが今後どのような影響を及ぼしてくるのか、まさしく理科の成績に出てきているという気もします。その辺りを、ＩＣＴで端末が入ったからといって補える部分もあるのかもしれないですけれども、やはり五感を使って感じて学んでいくということ、その機会が奪われてしまっているということが非常に懸念されているところです。

○長田教育長

現状の認識は大体教育委員の皆さん言われたとおりですが、一つだけ課題を絞って申し上げますと、先ほども出ておりましたが、理科の実験、コロナ禍で少し制限がかかっているということもありますが、子供たちは大体、理科の実験は楽しいという感想なのですね。ただ、なかなかこのテストをやりますと、結果に結びついていない。神戸市の学力定着度調査では、やはり理科に課題があるという結果が出ています。これは何なのかということを考えたときに、当然学校現場では授業の始まりに目当て、いわゆる勉強の学びの目的ということを説明して、学んで、そして授業の最後では振り返りということでやっておりますけれども、学ぶ喜びを感じるためには今日のこの授業、この単元の狙いはなんなのか、それがどういうところに結びつくのかというこ

とをはっきりと子供たちに理解してもらう。それが学びの喜び達成、やり遂げたときの達成の喜び、そういうことにつながっていくと思いますので、そういったところにもう少し重点を置いて授業を進めるよう、今、事務局で考えてもらっていますけれども、そういうところが、これからの一番の課題ではないか。何も知識の詰め込みということではなくて、先ほど雲の説明もありましたけれども、やはりそういった狙いをきちんと子供に理解をしてもらう。そういうところから学びというのが始まるのではないかという気がしています。

○久元市長

私から問題提起させていただきたいところが、冒頭、山下先生、正司先生がおっしゃった格差です。格差が存在するわけです、間違いなく。同じ学校でも同じクラスでも、それから学校間、地域によって格差が存在する。

この格差の問題は学力テストの学校ごとの数値に表れるわけですが、これは自治体によっては、例えば市長の中にはこれを公開して、そしてそれを基に切磋琢磨して頑張ってもらうということを要請して、大きな議論になるところもあるわけですが、私自身はそういう要請をするつもりはないわけです。やはりこれは非常に慎重に取り扱うべきではないかと思います。今日は公開なので、そういう資料はもちろんない。しかし、そういう格差という問題が存在しており、ひょっとしたら拡大しているのではないかということは、学力を考えるときに明確に認識している必要があるのではないかという気がするわけです。

ですから、非公開の教育委員会の場でそういうデータが当然あるでしょうから、この学力を、その格差が拡大しているということを前提にして、それぞれどう上げていくのかということ。もう一つは、永遠の課題だと思いますけれども、非常に学力がもともと優秀な子供をどう伸ばしていくのか、それから、なかなかその学力が十分身に着いていない子供をどう引き上げていくのかです。その辺のこのデータも含めた対応策ということについてどう考えておられるのか、難しい問題ですけれども、今日は公

開であるということを前提にしてお話をしていただきたいと思いますが、いかがでしょう。

○山下委員

十分にお答えできない部分もありますけれども、今、御指摘いただいたことは教育学の中でも大変重要な問題です。神戸でも恐らく学校ごとに先生方も御苦労されている面があろうかと思います。

アメリカの議論では、そのときに学力のテストの点数ということになると、どうしても高い低いで見てしまうけれども、例えば同じ６０点を取った学校があったとして、本当にその２つの学校というのは同じ力を持っている学校として考えていいのかと、確かに子供たちの出した点数はそれだけれども、もしかしたら一つの学校は５０点ぐらいまでしか伸びないところを先生方が頑張って６０点まで上げたのではないかとか、あるいは放っておいたらもしかしたら下がったかもしれないけど、先生方に踏ん張ってもらってそこで留まったのではないかという議論があるのですね。

そういった意味では、どれぐらい先生方が頑張ってそこまで到達したかという伸びの部分という、その部分に注目することが重要ではないかと個人的には思っています。そのうえで、例えば神戸市でも例年と比較してみると、今年はこの学校すごい点数が伸びているとか、あまり落ちなかったという学校をピックアップして、そちらの学校で果たしてどういう取組があったのか、場合によってはたまたま児童生徒の皆さんが頑張っただけとか、そういう雰囲気がよかっただけということもあるかもしれないですけど、そういうことを少し分析するのがまず一つ必要と思います。

２つ目に、そのうえでやはり困ったところにこそ手厚い支援をという方針で、これまでも十分神戸の教育はそういうことやってきたと思いますけれども、これからもそういうデータに基づきながら、困ったところにこそ手厚い支援をという方針が必要と思っています。

先ほど市長は全国学テのことをおっしゃられたのですけれど、私は全国学テは問題

自体見てみると今の時代にできるだけ対応しようと、子供たちにどんな力が必要なのかということを、割合、問題をつくる側が真剣に捉えて、つくってくれている問題だと私は思っているのですね。ですから、先生方ももちろん点数でどうこう言われるから心外な部分もあって、自分たちの頑張りが必ずしも点数に反映されるものではないというお心もあると思うので、そういうお答えになるとは思いますけれども、私は先生方が本当に例えば全国学テの問題を自分で解かれてみて、これ子供たちに必要だって思われたり、あるいは御本人が楽しんで解かれたりするという機会があるのか、ということをすごく思うのですね。先生方が楽しんだり面白がったりする姿があれば、この子供たちにもそれを伝えていっていただけると思っています。ですから、まずは先生方がどれぐらい問題についてお考えを持たれているかというのは、これからまた教育委員会でも議論していく必要があると思っています。ただ、そうやって知的に面白いとか、知的に楽しめるという状況は、ある程度やっぱりゆとりがないといけないと思う部分もありますので、これは先ほど申し上げた困ったところにこそ、手厚い支援にもつながっていきますけれども、先生方がそういうゆとりを感じられる、あるいは少し授業づくりに没頭できる、そういう条件整備というのもやっぱり教育委員会としてやっていく必要があると思いますし、また、これ口幅ったいですけれども、市長にもぜひまたお力添えをお願いしたいと思っております。

○久元市長

議論は現状どう捉えるのかということから、どう対応するのかというところに既に移ってきていると思いますけれど、そういうことも含めまして、いかがでしょうか。

○正司委員

格差という言葉、この格をつけるのは個人的には嫌で、差があるという表現のほうがいいと思っています。全員が同じ点を取るというのは実際無理で、ある程度、地域などいろんなところで差がある、違いあるということは事実だと思います。先ほどとり上げた点、それはあくまで平均の話なので、分布がどんなふうになっているのかを

分析しないといけない。先ほど山下先生がおっしゃった問題、差で捉えるのは一側面かも分からないけれど、その側面で捉えて、違いに環境要因が作用してないかといった分析も大切です。

できる限りのことを考えて問題を作られているわけで、そうすると、絶対水準としてちゃんと子供たちに理解が定着しているのかという分析をすることが重要になります。そして、届かないところを底上げすることで、分布が狭まる。できる子をスポイルするつもりは全然ないし、それはまた避けないといけないのですけど。そういう分析をすることが、今までもやってきたのですが、これからも大切と思っています。

学校でも、例えば図書館が整備され、司書さんがおられて、より本を読める環境ができてよくなっている。先生方も、これをうまく使って教育しようとする。と、逆に今までやってきたパターンに加えて新しいメニューが増えていることになります。ＩＣＴもそうですね。そうすると、今まで使ってきた時間のどこかを削ってあげないと、先生の時間は有限なので大変だと思っています。それをサポートするために、本に関しては司書さんが入ってサポートしているという形はできているけれど、それだけでうまく先生方の時間を生み出せているのか、これは先ほどの山下委員の議論につながるかと思います。そこが、非常に、今大切と感じています。

○本田委員

差のことですけれども、その背景に一体に何があるのかというところを、やはり分析が大事と思っています。先ほど言っていました、例えば興味というところでつまずいているのか、それとも学習環境というところでつまずいているのか、その辺りによっても、サポートの仕方は変わってくると思うので、それは学校によっても違うでしょうし、地域によっても違うと思いますけれども、環境をある程度整えたら、是正されるものなのかといったところの詳しい分析はいると思いました。

先ほどの議論と同じですけれど、やっぱり環境を整えるのもそうですし、家庭と連携するのもそうですし、ＩＣＴを使うのもそうですし、やっぱり教育のやり方もすご

く多様化している。学校の先生もすごく頑張っておられるけれども、今まで以上にやるべきことと言いますか、ハンドルしなければいけないことがすごく多様化しているので、そこをいかに働き方改革と言われている中でやっていくかというところを、教育委員会としても考えていけたらと思います。

○梶木委員

それぞれの学校において学力に差があるという状況は見えていますけれども、いろいろ学校に行っていますと、学校が始まる時間が大体一緒だし、終わる時間も一緒だし、授業の時間も大体一緒。その辺りも少し変えて行くとか、学校の状況に応じて、公立学校として、最低限やらねばならないことはありますけれども、そこの上に教育カリキュラムを自由度を持ってこの学校はこの時程でやったほうが、この学校にとっては体験授業をもっと増やせるのではないかとか、その先生たちがこの時間こうしようみたいなものができるのなら、カリキュラム編成に自由度を与えられるようになれば少し変わるのではないかという気もするのですね。４５分と決められるのも４５分座っていられない子もいたりしますよね。例えばお昼からも短くするとか、そういう自由度を持てた教育ができると変わるのではないかと思います。分からないですけれども、もう少し横並びの教育カリキュラムを、学校の状況に応じて入れるような、それもデータに基づいてやると思いますけれども、そんなことを考えます。

さっき本田委員もおっしゃったように、興味があるのかというところで言うと、いろいろ経済的な格差、正司委員がおっしゃった差があることによって、体験の貧困というのも非常に出ていると思うのですね。子供によっていろんな体験をさせてもらえる子と、なかなか体験の機会が少ない子がいるので、そこがそもそも興味を持つフィールドに立ててないというのがあると思います。

○今井委員

皆様からもいろんなお話があって、私もその差という意味で、平均と比べてというところとか、実際どうなのかと思って、前に１回、現場訪問させていただいたりもし

ましたけれど、当の先生たちはすごく問題意識を持っておられて、これまでもそういうところではかなり人的なプラスのサポートもありますので、そういうところで工夫して、しっかり放課後学習でフォローするというところ、今までも頑張っていただいていると思います。ただ、そこに参加したほうがいいかと思う子が全員参加できているかというと、なかなかやっぱりそうではなくて、そういう意味では親御さんも一緒に問題意識を本当に共有して、しっかり子供さんにも楽しく参加していただいて、そして学年が上がるときについていけなくなるお子さんが増えていくというのが、問題だと思います。授業が分からなくなったら学校も楽しくなくなるし、それが不登校につながったり学級運営に問題が生じたりと、いろんなところにつながっていくと思うので、授業がちゃんと分かって楽しくついていける状態を、低学年からしっかり守り、維持して伸ばしていくというところで、引き続き頑張っていただきたいと。そのためには人的なサポートもそうですし、環境のサポートもそうですし、教育委員会としてしっかりしていかなければいけないし、予算面とかでまたお願いをしたいと思っているところです。

○長田教育長

コロナ禍において、やむなく学級閉鎖も出ておりますし、そういう中で、このオンライン学習をやらざるを得ないということで、いい意味ではオンライン学習が進んでいるという面もありますが、やはり気になりますのは家庭学習がきちんとできる児童生徒、それからやっぱり家庭学習はなかなか進まない、できない、二分化とは言いませんがそういったところが非常に懸念をされるところだと思います。

特に学校現場においては、学習が身についていない、遅れがある子供に対して、一生懸命に本当にフォローをしておりますが、特に学級閉鎖が解除された後、学校に出てきたときに学習の定着状況がどうなのか、確認をして把握をして、そして不十分であるとか遅れがある場合は、補充の授業とか少人数指導、または放課後学習といったことをしております。これは教員だけで全てできるものではありませんから、今も既

に学習指導員ということで、学ぶ力・生きる力向上支援員という主に教員のＯＢの方が入ってサポートをしてくれておりますが、やはり、私はこういった学習に遅れのある子供の学習を定着させるという意味では、この学習指導員の役割が非常に大きいと思いますので、教員免許も所持をしていただいている方もたくさんいらっしゃいますから、もっともっと活躍の場を広げていく、もっと経験を還元していただく、そういう意味で今までのやり方を少し見直して、少人数指導をもっとこういった学習指導員の方が一手に引き受けてやっていただけるような格好をぜひ取り入れていきたいと思っています。

○久元市長

この格差という言葉ですけれども、一人一人の子供がテストでいい点を取るか、あるいは取れないか。あるいは学校ごとにどうかというのが、それ自体がすごく価値を持つかどうかということについては議論があることで、そう意味から言うと、点数そのものの違いを格差というべきではないとは思います。しかし、あえて格差と申し上げたのは、残念ながらこの所得格差というのが広がってきているわけです、明らかに。世界的に見てもそうですね。

この所得格差というものは親の問題ですが、親の所得格差が子供の学習格差に影響していること、これも間違いがない。所得格差が、その健康格差にもつながっている。それから、自己肯定感の格差にもつながっている。あるいは、地域力みたいな格差にもつながっているという。そういう中に、子供たちが置かれている、学校も置かれている、先生方も置かれているという問題は、やはりこれ真正面から捉える必要があるのではないかということ。そういう背景があるにも関わらず、その低学力というものが、解決をひたすら学校現場、先生方だけに押し付けるべきではないのではないか。例えば、神戸市の中では市長部局も教育委員会と連携をしてそういう問題に取り組む必要があるのではないかという問題意識ですね。

二、三年前に、関係局長で集まったことがありますけれど、どうしても一過性にな

る。もう少し継続的に連携して取り組むことによって、先生方の負担を減らすことができないかということですね。ここはやっぱり情報交換が必要で、例えば、これは市長部局がやっていることではないですけれど、もちろん支援はしていますが、子供たちの要するに学習塾に行く経済力がない子供たちへの学習支援というのは広がっているわけです。しかしそもそも学力以前の生活習慣とか、それに問題を抱えている家庭がやはり残念ながら増えている。それが極端な例で言うと、ネグレクトになったり、虐待につながるというケースが出てきている。家庭の中の問題なので非常に難しい面があるわけですが、家庭環境が大事であることはそうなのですが、そもそもそういう家庭環境を提供できない家庭が存在していると。それが学力に繋がっていることは間違いないわけで、その辺のところをもう少し議論したい。総合教育会議というのはそのためにあるわけですから、教育委員会と市長部局との間でいうとそういう連携というもの、非常に難しい課題ではありますけれども、私自身はやっぱり問題意識として役所の組織とかが、ぜひこれを進めていく必要があるのではないかと感じております。

このことに関連して、それ以外のことでもいかがでしょうか。

○長田教育長

今、市長部局でやっていただいている学習塾といいますか、支援、学習の支援については、非常に私もありがたく思っております。ただ、家庭背景として、あるいはこの子供本人の意欲の問題もあるかも分かりませんが、そういった今やっていただいている学習支援に行って勉強しようという子供は、ぜひ引き続きお願いしたいと思います。しかし、そうでないと言いますか、意欲も含めそういう状況にないという子供も実際いるわけですので、なかなかこの全ての子供を同じ方向でというわけにはいかないだろうと思います。やはりその辺りは学校でどうしても面倒を見なければいけない場合、あるいは別の方法が考えられる場合、こういった、もう少し背景を分析しながらどういった格好で全体としてフォローしていくのかということについて、引き続き、ぜひとも議論をさせていただいて、また御支援のお願いをしたいと思っております。

○正司委員

今の教育長のお話に続くことになるのかも分からないですけれども、今１５歳未満人口、神戸市だったらたしか１２％もいないかというレベル、これ７５歳以上の人口より少ない。ということは、子供たちの状況を実は市民の方があまり御存知ないのかも分からない。その中で、市長からこういうふうに投げかけていただけるというのは、我々教育委員としては非常にありがたい。少ないので予算も少なくていいのではなく、少ないから手厚くできるいいチャンスだと思うのですね。そうやって力のある子供たちを育てていくと将来の神戸は明るくなる。ぜひともそういう方向で教育を。

いろいろな格差の影響を子供たちがかなり受けてしまっているのはおっしゃるとおりだと思っています。それを学校だけで解決するのは非常に難しいし、そもそもそういうものではない。だからそういうものではないということの理解を広めることも我々の仕事だと思っています。

○久元市長

目の前にあるのは多様な現実だと思いますが、多様な現実を踏まえたそのカリキュラムの自由化とか、学校の自由度、この辺はここで議論をしだしますとなかなか大変かと思いますが、これは教育委員会でしっかり議論していただきたいと思いますし、教育委員会事務局の皆さんと神戸の子供たちのためにどうしたらいいのかということを、ぜひ考えていただければと思います。

次は体力の説明をお願いします。

（２）体力・運動能力向上に向けた取組

○教育委員会事務局教科指導担当部長

体力の向上について説明をさせていただきます。

資料の２ページ目を御覧ください。これは、全国体力運動能力調査の近年の状況です。学力と同様な表し方でして、横軸の０が全国平均を示しております。このような状況で小学校５年生におきましては、男女ともに全国平均を下回る状況が続いている

という状況でございます。

続きまして、中学校２年生の状況を御覧ください。

中学校２年生におきましても男女ともに似たような厳しい状況が続いて、全国を下回ることが続いております。小学校、中学校共に厳しい状況と認識しているところでございます。

次の資料を御覧ください。

これは同時に取られました児童生徒質問調査の結果でございます。

一番上の一つ目は、体育の学習は「楽しい」、「やや好き」と答えた割合が高い割合を示し、全国平均を上回っている状況が続いております。しかしながら、一方でコロナ禍、コロナ前に比べ、運動やスポーツをする時間が減ったと答えた割合が全国同様に小中共に高く、特に中学校女子におきましては５０％を超えるという、全国をかなり上回っている状況にございます。

また３つ目のところですけれども、スクリーンタイム、学習以外でテレビ、ＤＶＤ、ゲーム機やスマートフォン、パソコンの画面を３時間以上見ている割合を示しておりますが、全国平均と同様とても高い数値を示しております。

特にスクリーンタイムにおきましては、昨年度から比較しますと小学校で約５％、中学校では９％増加している状況でございます。

これらのことを踏まえて、この体力低下の要因は一つとして、コロナ禍において先ほど来お話がありましたように、体育学習や部活動等の色々な制限があり、運動機会の減少が大きく影響しています。また、生活様式も一転しておりますので、先ほど出ましたスクリーンタイムの増加も大きな要因であると考えております。

そのような状況を踏まえまして、全国体力・運動能力調査の結果を有識者や保護者、または学校の立場から、様々な御意見をいただきながら教育委員会として分析をしているところでございます。また、そこで挙がっている課題、分析結果を学校と共有して、体力向上に向けた取組を３つの視点に沿って進めており、その内容について説明

させていただきます。

一つ目は、運動内容の工夫という視点でございます。

体力向上に向けましては、運動やスポーツをすることが好きな児童生徒の育成を目指した体育学習の工夫、改善が重要と考えております。そのためにも遊びの要素を取り入れるなど、誰もが運動の楽しさを味わうことができる授業づくりを推進しているところでございます。

２つ目に運動意欲の向上の視点についてです。児童生徒が自ら運動やスポーツに親しむことが大切であると考えており、１人１台の端末を活用して、自分の記録を振り返る記録の「見える化」を図り、取り組んだ足跡や伸びを実感することで運動意欲の向上を図りたい。または、意欲が向上することによって、運動やスポーツの習慣化につなげたい、と考えております。

３点目は運動機会の確保ということです。コロナ禍の長期化により、子供を取り巻く環境が大きく変化して運動をする機会が激減しています。そのためには、児童生徒が安心して体を動かせる機会を保護者や地域、社会等と連携して創出していきたいと考えております。

もう少し、具体的に説明をさせていただきます。次の資料を御覧ください。

運動内容の工夫や意欲向上について、特にＩＣＴを活用したことについて説明させていただきます。

左の写真は５年生のバレーボールの授業でございまして、１人１台の端末を活用している様子です。試合の様子を子供たちが自分で撮影して、その後すぐに作戦会議でその動画を見ています。当然、自分の様子やチームの動きが分かるということになりますと、子供たちは主体的に学習に取り組んでいることにつながっていると思います。

授業以外でも、民間事業者と連携しまして１人１台の端末を活用した実証授業を進めております。日々の運動の記録を１人１台の端末に記録して、自分の記録を振り返ることで伸びや成長を実感したり、友達や設定目標と比較することで運動の意欲を高

めたいと考えております。

このような１人１台の端末を活用して、体育授業の工夫、改善を進めるとともに、やはり児童生徒の運動への意欲を高めていきたい、向上させたいと考えております。

次の資料を御覧ください。

３つ目の運動の機会の確保ということについて、説明をさせていただきます。

現在、感染予防対策に伴って体育授業はもちろん、部活動や行事においても様々な制限がある等ございます。

生活様式も一変して、子供たちにとっては外で体を思い切り動かす場所、機会が激減していると考えております。このような状況を鑑みまして、上記の写真のように、子供たちが安心して運動やスポーツに親しめる、放課後の小学校の運動場や体育館等も活用したいと考えております。

活動に当たりましては、保護者や地域、大学生の外部の方とも連携を図り、運動の機会の創出を図っていきたいと考えております。

以上のように、この３つの視点を連携させながら、児童生徒が自ら運動やスポーツに親しむ習慣を身に着けることで、体力向上を図っていきたいと考えております。

説明は以上でございます。

○久元市長

ありがとうございました。

体力について教育委員会事務局が持っている膨大なデータの中で、時間の関係で代表的な指標を出してもらったと思いますが、小学校、中学校のこの状況、どういうふうに御覧になっているのか。その背景に何があるとか、どう考えたらいいのか。

まずはその辺から、話していただきたいと思います。

○本田委員

体力が低下していることはもちろんこのコロナの影響というのはすごく大きいのではないかと思っていますけれど、その前からも、全国平均からは低いというところで、

もちろん体力向上ですけれども、その根底にあるというか、健康意識というところがやっぱり大事だと思っています。子供の頃から、体力というか運動するということがどのように健康につながるというのを、家庭も含めてですけれども、健康意識、健康を維持するスキルは上げていただくというのは大事だと思っています。やはり子供の、例えば、視力低下だったり、スクリーンタイムの影響もあると思いますけど、肥満のことだったりという、健康問題も増加していると思うのですね。子供の数は少なくなっているけれども、やはり慢性疾患を持つ子供というのは増えてきていますので、そういう意味では運動を増やすだけでなく、それが健康につながっているというところを家庭と一緒にできたらというのは看護の視点で思っているところです。

同じ時間内、同じ機会でも、運動能力が上がるような内容を充実させていくというのも、大事だと思っております。家庭との連携というのが、学校の中で、例えば体育の時間というのは決まっていますし、おうちの方とどれぐらい一緒に外に出るのかとか、一緒に体力づくりだったり、健康づくりというのができていくのかというのは重要と考えています。

○山下委員

体力運動能力について、私も神戸の状況が意外だと思っています。

前の職場が和歌山県だったけれども、和歌山県の場合はいわゆる自動車の普及でどこに行くにも子供たちも歩いたりすることがなくて、学校の統廃合が進んだ結果、スクールバスでの通学ということになって体力低下が非常に懸念されていたのですね。

神戸に来てみると公園がたくさんあって、和歌山も公園があったけれど、大体年配の方しかおられなかったけれど、神戸では子供たちもよく遊んでいるので体力、運動能力はてっきり高いと思っていたのですけれど、思わぬ結果で驚いています。

これについては他都市との比較をしてみないといけないと個人的には思っています。市長もお考えと思いますけれども、神戸の分析というよりは他都市の状況分析を丁寧にして、例えば、私は良し悪しあるとは思いますけれども、運動系の習い事のバリエ

ーションとかその普及率とかは一つ考えてみたいと思っています。ただ、その背景にはまず親御さんの意識、そしてまた経済的な問題、さらに地域全体の文化と言いますか考え方の問題もあるので、神戸スタイルで何か手立てが打てるようなところあればということは思っています。

２つ目には、子供たちが何で運動をしないか。私よく運動神経という言葉、学術用語ではないですけど、これは０か恐らくマイナスと自己評価しているけれども、そういった人間からするとやっぱり劣等感がすごい根っこにあって、それで今やらない。例えば、子供たちのスクリーンタイムが増えるのはあっちのほうが楽しいから。ではなんで楽しいかというと、自分の思うどおりになるというところがあったりする。ところが、運動というのは、実際友達との関係の中で劣等感を感じたり、あるいは大人に叱られたりとかそういったことがあるという中で、昔からある群れ遊びを現代的にアレンジしながら、例えば、苦手な子だけで集まって、その中でも年長の子は年長であるという理由だけで偉そうな顔ができたり、小さい下の子供たちに教えてあげられるような、今の時代に合ったコーディネートをしていく必要があると思っています。

○梶木委員

体力、非常に、前から神戸市は課題だというのが出ていたけれども、コロナになって部活が十分にできなくなるとこんなにも運動しなくなるというのが出たと思います。

そもそもさっき本田委員もおっしゃったけれども、健康意識とか、運動をなぜするのだろうと、気持ちいいからする、楽しいからする、体を動かすということですよね。子供で言うと、やはり小学生と中学生であったら体の大きさも全然違いますので、１０歳ぐらいまでというので言うと、外遊びをいかにしっかりするかということだと思います。その公園もしっかりあるのにと、山下委員おっしゃったけれど、まず先ほどの正司委員のお話にもあった、少子化が非常に進んでいるということは、一緒に遊ぶということが非常に難しい。約束しないと遊べないという現状ですね。

私もいろいろ調査したことありますけれども、時間がないというのは子供たちの最

もの訴えです。遊ぶ時間がない。あるのではないかと言われるかもしれないですけど、細切れの遊びでは、時間では駄目なのですね。このお稽古からこのお稽古行く間に２０分あるという、この２０分はどうしたらいいかって、携帯型のゲームとか、今だったらスマホが一番便利に遊べますね。この間に鬼ごっこはできないですよね。空間は隙間で遊べますけど、時間は隙間で遊べないですね。こういうことをもう少し分かって、子供たちの生活を、どういうふうに時間を、しっかり固まって確保してあげるかという、さっきの教育カリキュラムにもつながりますけれども、時間が本当に追われています。ぼーっとしているということができない世の中なので、子供たちにもう少しぼーっとできる時間を与えてあげたいけれども、なかなか、次これ次これと言うので、都会でも小学校の前に行くと、下校時間にお稽古に運ばれる子供たちのお車が並んでいたりしますので、やはり運動でつく体力と遊びでつく体力は違うと思うのですね。しなやかな体づくりというのか、忍耐力というのかもう少し外遊びの機会を設けるような方法に、体力をつくるのなら、体幹がぐらぐらの子供がいっぱいいますから、その辺り、健康に長生きするためには大事だと思います。

〇正司委員

以前、教育委員会で議論したときに、政令指定都市の中での順位の資料がありまして、それでは小学校は真ん中より低いですけど、めちゃくちゃ低いわけでなく、政令指定都市全体が全国平均より低い状況でした。中学校は残念ながら政令指定都市の中でも下の方でしたが。小学校ではこのように、都会の子供たちがどうも体力テストの結果的には体力がないという傾向はあると思う。ただ、その背景にあるもの、特に神戸が継続的に低い背景にあるもの、今、梶木委員がおっしゃったようなお稽古や塾の影響、私もあるのだろうと思いますけど、本当なのかどうかはちゃんと検証しないといけない。以前だったら、外で近所のお兄ちゃんたちと遊ばないと楽しい遊びがなかったけれど、今だったらそれ以外の家で遊べる。一人遊びで非常に面白い物がたくさんあるので、その中で外遊びというのがいかに面白いのかというのは、多分誰かが引っ張り

出さないといけない。引っ張り出すというので、お兄ちゃんという存在が今はなくなった中で、少し政策的につくる必要があるのかもしれません。そういう意味では大学生を活用した枠組み、それも一つの仕掛けになる気もしているところです。

○今井委員

皆様からも、いろんなお話がありましたけれど、私も子供二人育てていて、同じような環境で育ったのですが、一人はすごい体を動かすことが好きですけど、一人はインドアでごろごろしているほうが好きという。同じように育っていても、やはり個人差もあって、でも他方でさっき本田委員もおっしゃったように、健康のためとか、いろんなところに意識を向けて、問題と捉えて自分でこうしようと思って、もう少し運動しないといけないという、あんまり運動しない本人も意識して動かすようになったりというところで、子供はすごく押し付けを嫌うので、子供たちにも今のこの神戸市の体力の状況などをしっかり捉えてもらって、子供たちも自分たちでどうしていったらいいかとか、楽しく体を動かして体力をつけて健康になっていくにはどうしたいいかというのが、子供たちにも大人と一緒に話し合うような機会があって、いろんな取組を現場で実践していただくというのも必要だと思います。大人もコロナもあって、なかなか体を動かさないというのが実際だと思うので、本当に全市的に、大人も一緒にみんなで楽しく体を動かそうという取組ができたらと思っています。

前に少し見たのですけれど、大分県で健康寿命が一番になってというのが、すごく何年も前から、県と産業界、医師会、報道、大学機関など、いろんなところが一体になって、こういうこと、ああいうことしよう、といろんな実践されて、それで健康寿命が上がって、大分は確か体力テストもすごくよい。先ほどもあった他の自治体の取組も参考にしながら、神戸でどういうことができるのかというのを考えていけたらと思っております。

○久元市長

コロナが出てきて２年余りになりますけれど、神戸市はコロナが始まった直後を除

いて、不要不急の外出自粛をお願いしますということをしたことがない、言ったことがないのです。それは弊害のほうが多すぎると。閉じこもりになっていたら、シニア世代は認知症が進むし、フレイルになるし、子供たちはスマホ漬けになって、ゲーム漬けになってということを、これは、意識的に言ってこなかった。それから、コロナが始まってしばらくして、むしろ野外活動に対する助成をしたことがあり、結構申込みがあって、いろんなことをやってきたのですね。ただ、そもそも梶木先生がおっしゃったように、外で遊ばせない、遊びたくないというマインドが広がっているのなら、行政としてどうしたらいいのかと、無力感にもさいなまれるところはありますけど、どう考えたらいいのでしょうか。外遊び、運動で身につく体力と、遊びで身につく体力は違うでしょうし、神戸市もささやかながら、令和４年度の予算で森のようちえんで、これも本当に全体から見たら、ささやかなことなのですけれども、どうしてささやかになるのかというと、外で遊ばないようになっているし、遊びたくないし、家の中で一人遊びしていると、ほかの都市の比較以前に、日本中が、子供の体力が低下するに決まっていますね。処方箋というか、解決の糸口というのがあるのでしょうか。既にお話の中にそういうヒントのようなものがあるかもしれませんが。

○梶木委員

やはり乳幼児期が大事だと私は思っていまして、乳幼児のいろんな児童館などでやっておられるのが屋内遊びが中心なのですね。森のようちえんのように、すごくいい活動されているところに行くのは、親も子もものすごくハードルが高いので、でも、児童館などでやっている親子広場みたいなものが、たくさんあると思うのです。そこがメインは屋内だと思う。

そういう人たちを近くの公園でお外に出してみてというので、お外で子育てみたいな子育て広場みたいなものが、神戸市は少ないのではないかと思います。こういうものはたくさんあるので、そういうところから親の意識をまず変えていく。親世代が遊んでいないですから、外遊び気持ちいいよね、子供たち、外で遊んだらよく走って、

そしてよく寝てくれて、子育て楽よねということを、外で遊べばこんなに子供たちの声が気にならないなど、そういう乳幼児期にまず親を変えていくというのは大事だと思います。そのように舵を切られている自治体もあると思います。

○本田委員

体力テスト、体力向上となると、走る、スポーツするというイメージがどうしてもあると思いますけれど、先ほど山下先生が言われていたように、子供のタイプによっても激しい運動が好きな子、そうでない子がいると思いますけど、健康の観点から言うと、例えば家族と一緒に散歩に行くだけでもいいと思います。コロナ禍でみんな運動が制限されたときに、やっぱりそれを意識的に散歩が大事というところで、子供を連れて歩き回っている家庭も結構あったように思うので、その辺り、健康意識を上げていくというのはすごく重要だと思っています。それは市全体でできることと思いますし、今、梶木委員も言われていたみたいに、大人というか私たち子供を育てる世代があまり遊んでいなかったりするので、具体的にこういうもので一緒にというのをやはり具体的に提示していかないと難しいというのも思っています。

子供の体力のデータですけれど、例えば、神戸市のお母さん世代、お父さん世代ぐらいの体力で、運動をどれぐらいやっているかというのが、全国と比べてどうなのかというのが、すごく気になりました。子供だけではなくて、家庭全体というか、全体的に落ちているのであれば、市とともにというか、教育委員会だけではなく、家庭全体、市民全体を上げていかなといけないとも感じています。

○久元市長

ささやかながら神戸市でやっていることは、一つは、屋内で子供を遊ばせたいというニーズがやっぱり高い。市民ニーズに沿って施策は展開しないといけないので、区役所にこべっこあそびひろばというのをつくって、これは税部門が新長田の合同庁舎と統合してスペースができたのです。そこの後を親子連れで遊ぶスペースにしたのです。これ結構人気があるのです。

もう一つは、こべっこランドを今度相当拡充して、和田岬に移転するのですけれど、あれのミニ版を今度は六甲アイランドにもつくったりしたのです。ふわふわドームは御存知でしょうか。ふわふわドームは湊川公園にあって、いつ行っても子供が飛び跳ねているのですね。今度六甲アイランドにこれをつくる。また、公園でボール遊びはいけませんという、これは公園部局とずっと議論しているのですけれど、公園を利用する世代によって、静かに過ごしたいというのとボール遊びしたい子供たちと、それから乳幼児を連れたお母さんもボール遊びを迷惑と思っているのですね。この辺の調整をどうするのかというのは苦労していますが、そんな形で外遊びが少しでもできるように環境は整えていきたいとは思っております。

あとは、ほかの視点とかあるいはどうしたらいいのかということ、難しい問題ですけれども、いかがでしょうか。

○長田教育長

何か特別の考えがあるというわけではありませんけれど、この体力、運動、本当に難しい問題だと思います。世代的に言うとやはり段々と、さっきも話出ましたけれど、今の親御さんはあまりスポーツ経験がないという、恐らくそういう方々の割合がどんどん増えていくだろうと。それで親御さんとして、子供をどう育てていくかという、そこがポイントになってくる。そういう意味では先ほど出てきていますように、乳幼児、小さいうちから外遊びをすることは大事ですし、市立幼稚園は非常によく運動もしていますし、市内の認可保育園、私立も含めて園庭がありますから、これは非常に大きいのではないかと思います。たださっきも話が出ましたように、この公園の問題は、あえて言う気はありませんけれど、非常に難しい問題だというのは分かりますが、児童が公園などでいろんな遊びが制限されている中で言いますと、どうしても地域の中で見たときに、学校の運動場というのは非常に大事な資源、資産であるということに当然なるわけです。土曜日、日曜日、休日は学校施設開放で野球をやったりサッカーをやったり、いろんなスポーツをやっていますけれども、やはりそういう球技の活

動に加わっていない子供たちをいかに普段から、日常から運動の機会をつくっていくのか、確保していくのかということから言いますと、どうしても放課後にそういう運動をする機会がいるのではないかということで、来年度から大学生に見守ってもらって運動を行ってもらおうということを考えています。どうしても政策的にそういうことを入れていかないと駄目だと考えました。

実際に既にある小学校では放課後に運動場をつくって、この前伺ったスクールミーティングにいた学校は、放課後に子供たちを運動場で縄跳びさせたり、いろいろ運動させたり遊ばせているという学校もありますから、学校としてできることは、せっかくのこの運動場を、いかに、特に平日の放課後にどのように活用するのかということで、ぜひこれは全校に広げていきたいとは思います。しかし、学生さんばかりに頼っているわけにもいきませんので、もちろん学生さんに従事していただくのは非常にいろんな意味でいいことだと思いますけれども、やはり地域の方々にも学校運営協議会が令和４年度中には全ての小中学校にできますので、そういったところと神戸っ子応援団とも連携をしながら、地域の方々にも少し見守りのお手伝いを、御支援をしていただけたらありがたいと思っています。

○久元市長

非常にいい取組だと思いますけれども、この施策について詳しく説明をしてもらえればと思います。運動場の放課後の活用は今日の体力向上というところから見れば非常に意味がある。

○教育委員会事務局教科指導担当部長

今のお話のとおり、子供たちにとって学校の運動場は安心して、親しみある場所ということで、とても大事にしていきたいと思っております。放課後につきまして、運動場がありますので、その中で子供たちが一番、今、群れて自由に遊ぶというところですけれど、なかなかその習慣がないので、これを地域の方、また先ほど言われました学生さん、また他のいろんな団体と協力しまして、そういう場所を提供して子供た

ちに広げていきたいと。

内容的には、当然、子供たちが自由に遊ぶだけではできないので、その辺りは学校の中で授業と少しうまく合わせて、授業でこれがすごく楽しい活動になったので、引き続いて放課後もできるなど、そういうことも踏まえた計画を一緒に考えて作成していきたいと思っております。

以上でございます。

○久元市長

指導するのはみんな学生ですか。

○教育委員会事務局教科指導担当部長

計画は学校で立てますけれども、見守り活動は学生等の地域の方にお願いしたいと考えております。

○久元市長

多忙化も非常に大きな問題なので、学校とか先生方に対する負担は大丈夫ですか。

○教育委員会事務局教科指導担当部長

今おっしゃっていただいた視点で、地域の方等にお力をいただいてというところで、その改善を図っていきたいと考えております。

○久元市長

体力の問題は、まだまだアプローチがあり得ると思う。あとは、こういうことをもっと分析したらいいなど、特に一人遊び、特にスマホとの関係、これはまだまだやるべきこと。この前の竹内先生のお話も想起しながら、ほかはどんなことが考えられるでしょうか。あるいは、こういうアプローチで分析をして背景を探るということもあろうかと思いますけど、いかがでしょうか。

○山下委員

今のお尋ねに、必ずしも正面から答えられない部分がありますけれど、まずは放課後の校庭開放はすごい私は意味があると思っています。

どうしてもさっきの学力もそうですけど、現代はその家族孤立主義というのですか、家族の中で完結していく時代なので、それを無理にこじ開けることは難しいとしても、家族同士、あるいは地域と一緒にという軌道修正にもなっていくと思って、子供たちもすぐに家に帰らずに、校庭に残って遊んでくれるというのはとてもいいと思っています。

その中で、例えば歳の近い大学生で、かつ先生とは違う立場からいろんな遊びを教えてもらったり、あるいはスポーツもその中で教えてもらったりするとすごくいいと思っています。

手立ては、多層的に打っていかないといけないと思いますけど、そのときには、私は、遊ぶ能動性を持っている子はどんどん遊んで、体力、運動能力向上して行くと思いますけど、ここに来ない子たちをどうするかという問題は、そういう立場から今話していますけど、自分のことを振り返ってしか話していないけれども、そういった点では学校の先生方、今、多忙化の話が出たばかりで大変恐縮ですけど、これまでに培われた指導力をもう１回集約しなおすことができないのかと思っています。つまり、苦手な子にいかに苦手を克服できるように教えていけるかということを、恐らく蓄積されてきたはずなので、それをもう１回少し集約して、例えばこのさっきの校庭のサポーターに来てくれる大学生とかにそれを伝えていくとか、そういったこともまたあり得るという気はしています。

現状なかなか難しくて、例えば跳び箱というのも２０年、３０年前に誰でも飛べるのだというコンセプトで教材なども開発されていますけれど、これは神戸市内の学校ではないですが、先日お邪魔した学校でもやっぱり跳び箱というと、小学校４年生の授業でしたけど、先生がピッと笛を吹いたら助走をつけて踏切板で飛ぶ、飛べる子は飛べますけれど、飛べない子は飛べないまま。では先生は何をするかというと、「はい、もっと上手に手をついて」と言いますけど、その手をどういうふうについたらいいのかということをちゃんと教えてあげないといけないはずなのですね。ところがそ

ういったことができなくて、やっぱり御自分ができた方、得意な方はどうやったらできるようになるかということをうまく伝えられない場合があったりもする。逆にそれをずっとうまく伝えてくることが、授業の中で、特に神戸が、もし体育に力を入れてきたというのであれば、そういったことをもう１回ちゃんと振り返ってまとめておく、そしてそれをもう少し広げていくということは必要だと。ですから、苦手克服プロジェクトみたいなものが学校の先生方を中心に立ち上げることができればということは、個人的には考えたりはすることもあります。

○長田教育長

そのことから言いますと、小学校の体育、今は担任が全ての教科を教えるということですけども、来年度から小学校教科担任制、主に５、６年生で取り入れます。特にこの体育は、体育の経験のあるスペシャリストとまでは言わないまでも、運動経験のある者が教えるのと、全く運動の経験のない担任が教えるのと、全然違うと思いますから、今、山下委員が言われたような視点も取り入れて、こういう方向でこういう観点でということも、そういった中で全校で共有しながら、体力の向上、それから一口に向上と言いますけれども、例えば、ボールを投げたことがない子供が増えてきている。びっくりされるかも分かりませんが、昔とは全然違って投げ方が分からない。あるいは反復横跳びはやったことがない。こういった一つのコツみたいなものがあると思います。そういったことも含めて授業の中で楽しく教えてあげるということが、教科担任制を通じて深まるのではないかという気はしています。

○本田委員

今の話にもつながりますけれど、放課後に校庭を開くというのはすごくいいと思っていて、一つは親御さんが安全に子供が遊べる場というところをすごく気にされているのではないかというのは、教育委員の間でもよく話をします。そうすると、安全に家でスマホで遊んでおいてほしいというか、外をうろうろして危ないところがあって、公園やそういうところになかなか行けないところでもあると思いますので、そういっ

た安全なところで、子供が体力づくりというか、十分に遊べる環境を整えるというのがすごくいいというのが１点。

今言われていた、体育の専門家みたいな方に、例えば放課後にもいていただいてというのも、例えば学生さんでもそういった能力の高い方を集めるというのも、一つかもしれないけれども、そういうふうにして遊び場を開放するだけではなく、そこがまた充実するようにというのも一つできると思いました。

スクリーンタイムのことですけれど、やはりこれも親のスクリーンタイムが延びていると思うのですね。自分たちも振り返ってですけど、子供と一緒にいてもスマホを見ている時間が長いのではないか、パソコンを見ている時間が長いのではないかというのが、どうしてもあると思いますので、前、竹内先生のお話にもありましたけれど、親子で考えて、どういうふうにやっていくかというディスカッションもすごく大事だと思います。なかなか子供だけでは解決しない問題だと思います。

○正司委員

スクリーンタイムの話を続けたいと思いますけど、私も、今、本田委員がおっしゃったとおりだと思っていて、昨年４月の議論にあったとおり小学校の高学年、中学校ぐらいになると、自分たちで考えて自らルールを作ろうと、そういうムーブメントになっていくので、大切なのは幼稚園とか小学校の低学年だと感じています。そのときに、親御さんが、スマホを子守代わりに与えているという状況は格好悪い、と言ってしまうと多分拒否されてしまうので、そうではなくて、外でみんなで遊ぶとこんなにいいことがあって楽しいということを、ムーブメント的につくらないといけないのでは。そのとき、わざわざある場所に行かないとできないとなってしまうと、連れて行ける親の家庭しか参加できないことになるので、身近にそういう環境をたくさんつくるということが大切になります。そういう意味では園庭とか校庭は大切な資産だと、感じています。

それとともに、住宅地のとくに枝道は抜け道のためにあるのではなくて、人々のた

めの公のスペースのはずなので、昔のようにそこで子供たちが遊べるようにすべきです。それはドライバー自身が自覚すればいいだけの話で。横断歩道手前で止まらないドライバーにそれを期待するのは難しいと言われるかも分からないですけれど、昔はできていたはずなので。台数が少なかったからできていたと言われるかもしれないが、そうではないと思う。譲り合えていた。道路空間は決して車を走らせるためだけに整備してきたわけではないので、この空間もうまく使わないと都市空間の中でもったいないと思っています。

もう１点、大学生だけに頼るのはよくないと思いますけれど、もし子供たちと近所、地域の人と大学生が一緒に子供たちと楽しむ活動を通じて、神戸のまちを大学生が好きになってくれたら、定着してくれないかという、そんなことも思ったりします。そのうえで、ほかのエリアの大学に行っている神戸出身の大学生も夏休みなどに来てもらって、そういう遊び活動に参加してもらえるという、そんな受け皿があるといいと感じました。

○久元市長

今のお話を聞いて感じますのは、外で遊ぶ以前に山下先生がおっしゃった、家族孤立主義というのですか、家族が家族だけで家の中に閉じこもっているということは、要するに、外に出なくなっているということですよね。そうすると、まちを歩いている人も少ない、繁華街も少ない、住宅街も少ない、郊外も少ないというように、明らかに人手が少なくなっていると間違いなく言えていることなので、これはやっぱり子供の遊びという観点以前に、とにかく外で過ごす時間というものを、どうつくっていただくか。そのための環境整備というのをいろんなアプローチでしていかないといけない、ということを改めて感じます。

正司先生がおっしゃいました、昔から道路も遊び場でもあります。ただ、道路はやはり車が通りますから。もちろん横断歩道で停止してもらわないと困るし、そういうことは県警と一緒に啓発に努めていかないといけないと思います。地道ながら新年度

予算でも力を入れているのは空き地の活用なのです。老朽危険家屋は神戸市が全国で一番数が多い７００戸の解体補助を用意していまして、３年前からかなり使われています。危ない老朽家屋は壊して、建て替えられるものは建て替える。それから空き地の有効活用を今図っていますけど、大々的にやっていきたい。例えば水道筋の商店街の中に、子供たちが夏、水遊びができるような場所が幾つかできています。そういうものを、まちの中にたくさんつくっていって、そこで家族とか地域の人が家庭菜園にしたり、ちょっとした芝生広場にしたり、子供の水遊びをしたり、花壇にしたり、そんなことをやっていったらそこにいろんな会話のようなもののつながりも生まれるでしょうから、そのようにいろんなアプローチをやはりしていかないと。今日の話を聞いて改めて非常に痛感したのは、閉じこもり系になっているということです。結局それは子供の体力の低下に、恐らくデータはそんなにないでしょうけど、その母親、父親世代の体力低下に恐らくつながっていると。まず、非常にトータルな視点で考えないといけないという気がいたします。

今日、始まる前は、どうしてこの神戸の子供たちの体力が劣っているのかとかいうことを中心にデータを分析できればと思ったのですけれど、今日聞いたら、データを分析する以前に、むしろ行動を起こさないといけないかもしれないという気もしました。今日は非常にいい意見をいただいたと思いますから、市長部局でできることはしっかりやっていきたいと思いますし、また教育委員会でも、間違いなく学力と体力は結びつている話なので、ぜひまた議論を深めて、体力、学力向上改善のための取組を進めていただければと思います。

また、市長部局と連携する部分はたくさんあると思いますから、ぜひ教育委員会事務局と企画調整局が窓口になって、市長部局との連携を図っていただきたいと思います。

３．閉　　会

○企画調整局教育連携課長

本日、予定しておりました議題は以上となります。

これをもちまして、令和３年度第３回の総合教育会議を終了とさせていただきます。

お忙しい中、皆様、本当にありがとうございました。